

# 小学生におけるADHD傾向と自尊感情

## A Study on Tendency of Attention Deficit Hyperactivity Disorder and Self Esteem in Elementary School Children

松 本 陽 子      山 崎 由可里

Yoko MATSUMOTO    Yukari YAMAZAKI

2006年10月6日受理

### Summary :

We tried to clear a system of self-esteem which ADHD suspects have and factors which are declined the self-esteem by investigating the self-esteem of ADHD suspect in elementary school students. At first, we asked homeroom teachers to send out two types of questionnaires to third grade and fifth grade students in the W city. The first questionnaire was called (1) ADHD RS-IV-J, which told us what the ADHD suspect is, and we got 1195 answers. In the self-esteem, we used the second questionnaire, which was called (2) self-esteem scale. We got this questionnaire's key from the Pope, A. W. 's self-esteem scale and got 1162 answers from the second questionnaire. About ADHD suspect, from the criteria of the DSM-IV, we decided that the people who got high scores in the DSM-IV were ADHD suspects. According to the first questionnaires, there were three types in the ADHD suspects: an attention deficit type, a hyperactive type, and a mixed type which had the attention deficit type and the hyperactive type. The attention deficit type suspects were 23, the hyperactive type suspects were 3, and the mixed type suspects were 17. About the self-esteem, we compared an ADHD suspects' group with a non-ADHD suspects' group in total scores of the second questionnaires and a lower standard which was composed from "body image," "family," "study," "hope" and "friend." We got the lower standard from the results of a factor analysis and the two questionnaires. According to a result of the comparison, an ADHD suspects' group had low total scores of the self-esteem in significant differences and had low scores of a part of the lower standard: "study," "family," and "friend," in significant differences. However, in parts of the lower standard: "body image" and "hope," there were no differences. As a result, the ADHD suspects had low self-esteem, compared to the non-ADHD suspects. Also, it was clear that the ADHD suspects had low self-esteem in parts of the lower standard: "study," "family," and "friend."

**要旨:** 小学生におけるADHD傾向と自尊感情の関係を調べることで、ADHD傾向の高い児童の自尊感情の様相を明らかにするとともに、自己評価を低下させている要因を探ることを目的とし、W市内の小学3年生および5年生を対象にアンケート調査を実施した。ADHD傾向については、学級担任が学級全員について質問紙(1) ADHD RS-IV-Jを用い評価し有効回答数は1195であった。自尊感情については、ポープらの自尊心尺度を参考に作成した自尊感情尺度(質問紙(2))を用い、学級担任の指導のもと児童がアンケートに答えた。有効回答数は1162であった。ADHD傾向についてはDSM-IVの基準を参考に得点の高いものをADHDサスペクトとした。本調査の結果、サスペクトは、混合型17名、不注意型23名、多動性-衝動性型3名の合計43名(約3.6%)であった。自尊感情について、合計得点および因子分析の結果得られた下位尺度「身体イメージ」「家族」「学業」「願望」「友だち」ごとにADHDサスペクト群と非サスペクト群を比較した結果、ADHDサスペクト群が非サスペクト群に比べ、自尊感情の合計得点が有意に低く、「学業」「家族」「友だち」の下位尺度においても有意に得点が低かった。「身体イメージ」「願望」においては、有意な差はなかった。以上により、ADHD傾向の高い児童はそうでない児童に比べ、自尊感情が低く、それは、「学業」「家族」「友だち」のそれぞれの地域においての自己評価の低さによるものであることが明らかにされた。

**キーワード:** 小学生、ADHD傾向、自尊感情

### 問題と目的

注意欠陥多動性障害 (attention deficit hyperactivity disorder 以下 ADHDと略す) は注意集中困難、多動性、衝動性を主症状とする発達障害の一つである。2002年2月から3月にかけて文部科学省が調査研究会に委嘱して実施された「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」の結果、知的発達に遅れはないものの学習面や行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合は6.3%であることが明らかにされた。この中には、ADHD児も含まれている。教育現場において、ADHD児は落ち着きがない、集団行動がとれない、トラブルが多いなど担任にとって「気になる子」である。特別支援教育についての最終報告が出されたこともあり、最近では、研修会などでとりあげられることも増えてきて、ADHD児に関する教師の認識が深まってきている。しかしながら、中には、「問題児」ととらえられて、特別な配慮も手立てもなく、叱られてばかりで自分に自信が持てない子もいる。特に小学校高学年から中学校にかけて、自己概念を形成していくときに、自尊感情を持ちにくく、二次的障害を起こすことが報告されている(岩坂ら(2002)、田中(1995)、福島(2000)、藤井(2003)など)。

ADHDの二次的な症状に関する研究では、自尊感情の低さについて言及されている(中田(2003)、高山(2003)、ヘンリック・ホロエンコ(2002)、マーク・セリコウイツ(2000)、井上(2004)など)。例えば、ヘンリック・ホロエンコは、ADHDの学童期について「学校に入ると、注意力や集中力の困難性が次第に明らかになり、周りにあわせて注意や行動を調整する能力に欠ける。学習面での困難性に加え交友関係もうまくなり、その結果自尊心が低くなる」と述べている。このように、ADHDをもつ子どもの自尊心を低下させない手だて、あるいは低下した自尊心をどのように回復させることができるかということは非常に重要な問題である。

ADHD児の自尊感情を高める取り組みとして、田中(2001)は、他の専門職との協力・連携体制の必要性を強調し、岩坂ら(2002)は、親訓練プログラムを通して、ADHDの子どもの行動、気分、親子関係、親のADHDの理解と自信度などを評価し、子ども自身や親のセルフ・エスティームが高まったことを報告している。

以上をふまえ、本研究において、ADHDの自尊感情を高めるために学校あるいは家庭においてどのような支援が必要かを検討するために、まず、ADHD傾向のある児童の自尊感情について研究することを目的とする。

次に、自尊感情について述べたい。本稿では、「自尊感情」をセルフ・エスティームの訳語として用いるこ

ととする。セルフ・エスティーム (self-esteem) とは、一般に「人が自分の自己概念と関連づける個人的価値観及び能力の感覚」と定義づけられる。また、「自尊心」もほぼ同義語として用いるけれども、「自尊心」は「自尊感情」を支えるひとつの尺度として位置づける意味で用いることとした。

自尊感情は、青年期において人格形成とともに成熟すると考えられ、わが国でもこの分野の青年期研究は盛んである。しかし、自己確立の中核をなすと考えられる自尊感情は、幼児期、学童期、青年期とそれぞれに発達の危機を迎えるといわれている。

ポーブラ(1992)は、自尊感情を知覚された自己あるいは自己概念の間の矛盾—たとえば、現実の自己と理想的な自己との矛盾—からとらえ得ると考えた。大きな矛盾は低い自尊感情を、小さな矛盾は高い自尊感情を示すこと、また、矛盾の起こり方により、問題の特定の領域(たとえば、学力、家族など)に焦点をあて、現実の知覚と理想的自己との間の矛盾を変容するために、知覚された自己あるいは理想像を変える工夫をすることができることにも触れている。また、ポーブラは、子どもの自尊感情を構成する因子として、次の五つの領域を考えることが有益であるとしている。

- ①社会的領域(自分は、自分の仲間との交渉や関係に満足を感じているかなどの感情に関する領域)
  - ②学力的領域(学業に関する自分自身の評価)
  - ③家族の領域(家族のメンバーとしての自分自身についての感情)
  - ④身体イメージ(身体的なみかけと能力の結合をさす)
  - ⑤全般的な自尊心(自己のより一般的な評価をさし、自分自身のあらゆる部分の評価にもとづくものである)
- ポーブラの示した以上の5点は児童の自尊感情を規定する要因として示唆に富むものである。

さて、わが国におけるADHD児の自尊感情についての先行研究は、管見の限り見当たらない。しかしながら、臨床的、あるいは経験上、ADHD児の自尊感情の低いことに触れている研究は看取される(岩坂(2002)、田中・毛利(1995)、杉山(2000)、齋藤(2000)、榎戸(1999)、鈴木・中野(2002)など)。これに対して、Mari TANAKA(2003)は、ADHD児の自尊感情に関する海外の研究を概観し、ADHD児・者の自尊感情について以下のように述べている。児童期のADHD児は、必ずしも自己評価が低いとはいえず、また、肯定的結果に対してはその原因を自分の特性に求めるといったその帰属スタイルを示し、「肯定的錯覚バイアス」が示されたことである。そして、これは同時に、自尊心の傷つきを防ぐための自己防衛としても機能していることが示唆された。さらに、かつて児童期にADHDの診断をされた青年・成人における自己評価の低さについては、その要因として社会的スキルとの関連を示唆している。TANAKAの研究はわが国の児童を対象としたものではない。けれども、児童期の

ADHD児の自尊感情はTANAKAの指摘するように、健常児に比べ、低くないという結果については、前述の臨床像とは相反するものである。

以上のような先行研究の検討をふまえ、本稿では、小学生におけるADHD傾向と自尊感情の関係に着目し、ADHD傾向の高い児童の自尊感情の様相および自尊感情を規定する自己認知の特徴を明らかにすることを目的とする。

## 方法

### (1) 対象者

W市内の8校の小学校に調査を依頼し、3年生20学級、5年生21学級から回答を得た。全回答1226のうち、欠席者や欠損値のあるものを除き、ADHDに関する有効回答数は1195（3年生男子316、女子296、5年生男子304、女子279）、自尊感情に関する有効回答数は1162（3年生男子305、女子290、5年生男子296、女子271）であった。

なお、本調査に際し、ADHDの診断をうけているかは問わなかった。

### (2) 調査期間

平成17年7月から8月

### (3) 質問紙

#### ①質問紙(1): ADHD RS-IV-J (学校版) (18項目)

質問紙(1)は、DSM-IVの診断基準に準拠してDupaulらによって作成された行動評価尺度で、山崎により日本語に訳されたもので、不注意9項目、多動性-衝動性9項目からなる。項目については、不注意(奇数番号)と多動性-衝動性(偶数番号)が交互に配列されている。「ない、もしくはほとんどない」に0点、「ときどきある」に1点、「しばしばある」に2点、「非常にしばしばある」に3点が与えられ、得点化できる。すなわち、ADHD傾向が高くなるほど、高得点となる。

#### ②質問紙(2): 自尊感情に関する質問項目 (30項目)

児童の自尊感情を児童自身が自己評定する尺度として、自尊感情の自己評定尺度を作成した。この尺度は、ポーラ(1992)の子ども用5領域自尊心尺度を参考に、質問項目を日本の子どもにわかりやすい表現に変え、尺度の妥当性を確認するため、小学3、4、5年生136名に対する予備調査(60項目)で得られた回答について、因子分析の結果、各因子の上位の項目を抽出し、30項目を採用した。それぞれの項目について、「そう思う」「まあそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5件法で回答を求めた。

### (4) 調査方法

質問紙(1) ADHD RS-IV-Jは学級担任が、クラスの全児童について評価をした。質問紙(2) 自尊感情についてのアンケートは、担任がやり方を説明し、児童が記入した。

## 結果

### (1) 小学生におけるADHD傾向

#### ① ADHD得点の分布

小学生1226名について、担任が、質問紙(1) ADHD RS-IV-J(学校版)に記入し、得点化したものをADHD得点とした。合計についての分布を図1に示す。なお、記入漏れ等の欠損値は31で、有効データは1195であった。

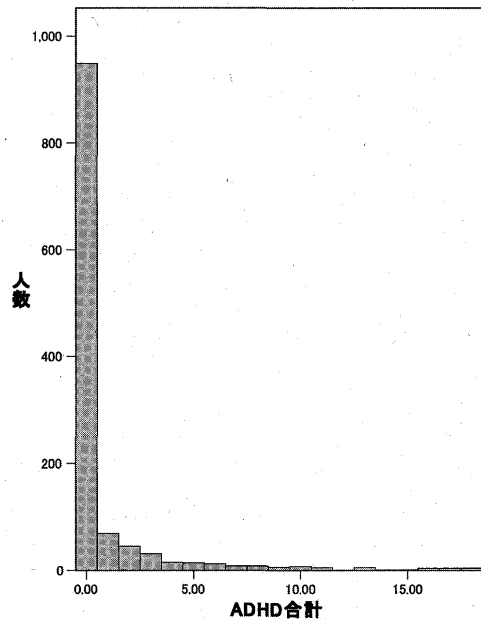


図1 ADHD合計得点の分布

ADHD合計得点は、最低0点から、最高54点で分布し、0点の占める割合が最も高く、全体で585人(47.7%)であった。

#### ② ADHDサスペクトの割合

質問紙(1) ADHD RS-J(学校版)はDSM-IVの診断基準に基づいて作成したものである。2点(しばしばある)3点(非常にしばしばある)がDSM-IVの基準であることから、不注意の項目において、2点以上の項目が6項目以上あるものを不注意優勢型のサスペクトとし、多動性-衝動性の項目において、2点以上の項目が6項目以上あるものを多動性-衝動性優勢型のサスペクトとし、その両方をみたすものを混合型のサスペクトとした。学年、性別ごとに比較したものが表1である。

サスペクトは、混合型17名、不注意型23名、多動性-衝動性型3名の合計43名(約3.6%)であった。

表1をもとに、学年および性別によって、サスペクトの人数に差があるかどうかを調べた。 $\chi^2$ 乗検定の結果、混合型、不注意型において有意な差がみられた。

(混合型 $\chi^2(3)=23.24$ ,  $p<.01$ 、不注意型 $\chi^2(3)=19.92$ ,  $p<.01$ ) 多動性-衝動性型については差がみられなかった。

表1 ADHDサスペクトの人数

		3年生		5年生		合計
		男子	女子	男子	女子	
混合型	サスペクト	13	1	3	0	17
	非サスペクト	303	295	301	279	1178
不注意	サスペクト	15	4	4	0	23
	非サスペクト	301	292	300	279	1172
衝動性	サスペクト	2	1	0	0	3
	非サスペクト	314	295	304	279	1192
計	サスペクト	30	6	7	0	43
	非サスペクト	286	290	297	279	1152

表2 混合型サスペクトの学年差および男女差

学年	3年		5年	
性別	男子	女子	男子	女子
残差	4.71**	-1.816+	0.743	-2.291*

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$  + $p < .10$ 

表3 不注意型サスペクトの学年差および男女差

学年	3年		5年	
性別	男子	女子	男子	女子
残差	4.257**	-0.827	-0.894	-2.672**

\*\* $p < .01$ 

混合型について、さらに残差分析をおこなった結果、表2のように、3年生男子が有意に( $p < .01$ )高い得点で、5年生女子が有意に( $p < .05$ )低い得点であることがわかった。また、3年生女子は得点が低い傾向にあった。( $p < .10$ )

さらに、不注意型について、残差分析をおこなった結果、表3のように、3年生男子で有意に得点が高く、5年生女子で有意に得点が低いことがわかった。( $p < .01$ )

以上のように、ADHDの混合型および、不注意型のサスペクトについては、小学生3年生男子が3年生の女子および5年生男女に比べて多く、一方、混合型および、不注意型ともに3年生男女や5年生の男子に比べて5年生の女子が少ないという結果が出た。

## (2) 小学生における自尊感情の様相

### ① 自尊感情得点について

小学生1162名における自尊感情の合計得点の分布を図2に示す。

また、学年別、男女別の記述統計量を表4、表5に示す。表4は、学年別の自尊感情の合計得点の平均および標準偏差を示したものである。t検定の結果、平均の差は有意であった(両側検定: $t(1160)=5.265$ ,

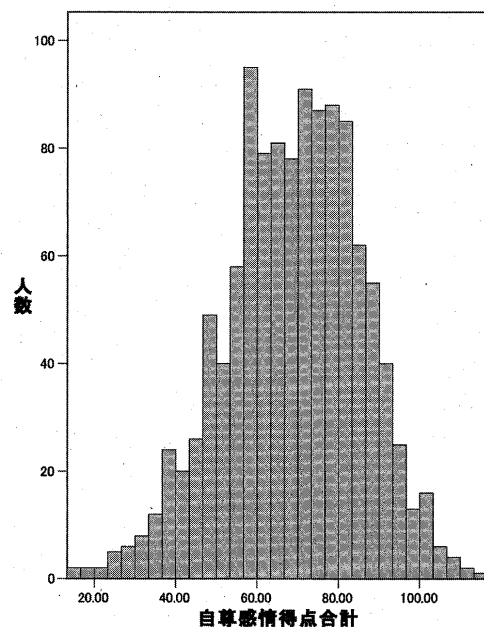


図2 自尊感情合計得点の分布

$p < .0$ )。つまり、3年生より5年生の得点は低いといえる。t検定の結果、平均の差は有意ではなかった(両側検定: $t(1160)=0.357, p > .10$ )。つまり、男女においては得点の差がないといえる。

自尊感情の特徴を明らかにするために、性と学年を

表4 自尊感情合計得点の平均と標準偏差（学年別）

	3年	5年
人数	595	567
平均	71.28	66.26
標準偏差	15.90	16.61

表5 自尊感情合計得点の平均と標準偏差（男女別）

	男子	女子
人数	601	561
平均	68.99	68.65
標準偏差	16.37	16.52

要因とする分散分析を行なった。結果については、図3、表6に示した。学年の主効果が有意であり、さらには交互作用も有意であった。つまり、3年生から5年生へ学年が上がると自尊感情は低下し、その低下の仕方は男子に比べて女子の方が激しいといえる。

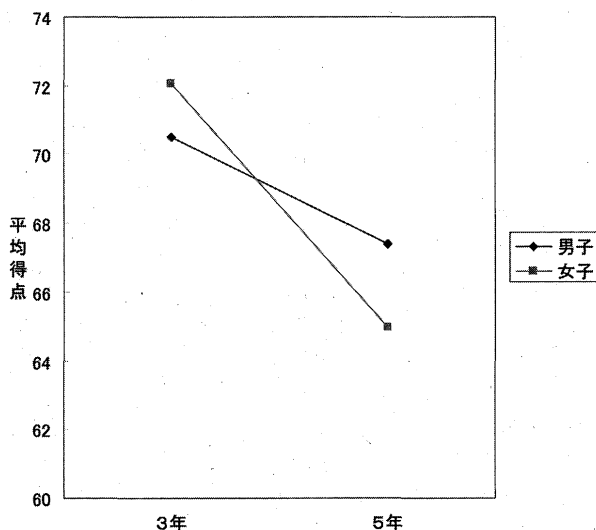


図3 学年および性別による自尊感情の平均値

## ② 自尊感情の構造（因子分析）

自尊感情尺度のうち、全般的な自尊心を表す8項目：「自分のことが好きである」「自分は大事な人間である」「いまの自分とちがっていたらいいと思う」「自分はいい人間であると思う」「今の自分にじゅうぶん満足している」「得意なものはない」「失敗してもべつに

気にならない」「じまんでできるものは何もない」は下位尺度の総体としての値と考えて全般的な自尊心の尺度とした。

自尊感情を形成する自己認知の側面の構造を明らかにするために、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行なった。30項目のうち、前述の全般的な自尊心を表す8項目を除き、22項目を採用した。因子の解釈にあたっては、負荷量.35以上の項目で行ない、「自分は親にとっていい子（むすめ、むすこ）だと思う」と「家族といっしょにいる時、とても楽しい気もちである」の2項目は負荷量が低く、削除された。第1因子には「自分の顔はいい顔だと思う」「自分はスタイルがいいと思う」などの項目が含まれており、身体イメージの因子と解釈した。同様に、第2因子には「自分のせいで親は不幸だと思う」「家族はわたしにがっかりしている」などの項目が含まれており、家族の因子と解釈した。第3因子には、「学校の成績には自信がある」「算数はとくいである」などの項目が含まれており、学業の因子と解釈した。第4因子には、「もっと友だちを作るのがじょうずだったらいいのと思う」「もっとかしこい生徒だったらいいのと思う」など、「もっと～だったらいいの」という願いを表していると考え、願望の因子と解釈した。第5因子は、「たくさん友だちがいる」「友だちになりたいと思った人とうまく友だちになれる」などの項目が含まれており、友だちの因子と解釈した。

このように、児童の自己認知の側面として、「身体イメージ」「家族」「学業」「願望」「友だち」の5領域を抽出した。結果は、表7に示すとおりである。

また、尺度の信頼性を表す $\alpha$ 係数は、第1因子.744 第2因子.654 第3因子.648 第4因子.562 第5因子.603 全般的な自尊心.602であり、尺度として中等度満足な値を得た。

## （3）ADHD傾向と自尊感情との関係

### ① ADHD傾向と自尊感情の相関

「ADHDの合計」「不注意」「多動－衝動性」の各項目別の自尊感情合計得点との相関は、表8（全体と学年別）、表9（男女別）、表10（学年・男女別）のとおりである。

まず、全体でみると、ADHD合計と自尊感情合

表6 自尊感情の平均値（標準偏差）と性および学年による分散分析結果

	3年		5年		性	学年	N=1162 交互作用
	男子	女子	男子	女子	F	F	F
	(N=305)	(N=290)	(N=296)	(N=271)			
自尊感情	70.52	72.07	67.41	64.98	n.s.	28.56**	4.34*
(標準偏差)	16.02	15.76	16.59	16.57			

\*\*p&lt;.01

\*p&lt;.05

表7 自尊感情の側面の因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

N=1162

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
	身体イメージ	家族	学業	願望	友だち	
自分の顔はいい顔だと思う	0.817	-0.003	0.027	-0.025	-0.026	0.659
自分の笑顔はすてきだと思う	0.770	0.010	-0.034	-0.012	-0.026	0.544
自分はスタイルがいいと思う	0.596	0.084	-0.026	0.103	0.059	0.404
自分の顔が嫌いである	-0.482	0.173	0.033	0.153	0.028	0.277
自分のせいで親は不幸だと思う	0.085	0.663	-0.057	-0.034	-0.008	0.430
家族はわたしにがっかりしている	-0.008	0.636	0.038	-0.054	-0.070	0.417
今の自分ともしとちがっていたら、親も幸せだと思う	-0.026	0.634	0.012	0.070	0.016	0.427
家を出て行きたいと思うことがある	-0.098	0.363	-0.024	-0.032	0.022	0.156
学校の成績には自信がある	0.091	0.053	0.749	0.014	-0.041	0.584
通知表の成績はいいほうだ	0.047	0.000	0.661	0.008	0.023	0.483
学校での勉強は全くためである	0.144	0.082	-0.472	0.094	0.021	0.211
算数がとくいである	-0.051	-0.006	0.406	0.060	0.102	0.200
もっと友だちを作るのがしょうずだったらいいのと思う	-0.041	-0.126	0.024	0.665	-0.183	0.395
自分ことを本当に好きと思ってくれる友だちがいたらいいのと思う	0.053	-0.096	-0.016	0.556	0.037	0.318
自分がかっこいい生徒だったらいいのと思う	-0.054	0.123	-0.092	0.412	0.095	0.215
もっと他の人のようにかっこよかったらいいのと思う	-0.016	0.152	0.061	0.365	0.059	0.190
たくさん友だちがいる	-0.039	0.059	0.035	-0.009	0.629	0.368
友だちになりたいと思う人とうまく友だちになれる	0.031	-0.005	-0.032	0.012	0.545	0.303
自分はひとりぼっちである	0.067	0.122	-0.042	0.131	-0.432	0.246
自分は友だちにとっていい友だちだと思う	0.182	-0.100	0.026	0.123	0.396	0.356
寄与率	3.356	1.640	0.891	0.718	0.578	
累積寄与率	16.782	24.982	29.435	33.024	35.916	

計のあいだに有意な相関はみられなかった ( $r = -0.129$ )。また、不注意、多動性-衝動性と自尊感情合計のあいだにも有意な相関はみられなかった ( $r = -0.162$  ;  $r = -0.068$ )。学年別では、表8のように3年生の「不注意」において、自尊感情合計との弱い負の相関がみられた ( $r = -0.238$ )。「ADHD合計」、「多動性-衝動性」では有意な相関はみられなかった ( $r = -0.191$ 、 $r = -0.107$ )。5年生においては、「ADHD合計」、「不注意」、「多動性-衝動性」すべてにおいて自尊感情合計との有意な負の相関はみられなかった ( $r = -0.158$ 、 $r = -0.176$ 、 $r = -0.102$ )。

さらに男女別でみると、表9のように、男子において、ADHD合計、多動性-衝動性では自尊感情合計との間に有意な相関はみられなかった ( $r = -0.187$ 、 $r = -0.115$ )。しかし、不注意では弱い負の相関がみられた ( $r = -0.226$ )。これに対して、女子ではすべてにおいて相関はみられなかった。

さらに、各学年で男女別にみみると、表10のように、3年生男子、5年生男子で、ADHD合計、不注意と自尊感情合計とのあいだで弱い負の相関がみられた。多動性-衝動性と自尊感情のあいだでは有意な相関はみられなかった。相関係数は、3年生男子が、ADHD合計で $-0.234$ 、不注意で $-0.284$ であり、5年生男子が、ADHD合計で $-0.222$ 、不注意で $-0.236$ であった。これに比して、女子においてはどの項目においても有意な相関はみられなかった。

また、ADHD傾向と自尊感情下位尺度 (自己の側面をあらわす5領域と自尊心全般8項目) のあいだの相関の結果を表11に示す。ADHD傾向 (ADHD合計、不注意、多動性-衝動性) とすべての自尊感情下位尺度 (「家族」「学業」「友だち」「願望」「身体イメージ」「自尊心全般」) において有意な相関はみられなかった。

表 8 相関係数（全体と学年別）

		自尊感情得点合計（全体）	自尊感情得点合計（3年生）	自尊感情得点合計（5年生）
ADHD合計	Pearson の相関係数	-.129	-.191	-.158
	N	1157	592	565
不注意合計	Pearson の相関係数	-.162	-.238 *	-.176
	N	1157	592	565
衝動性合計	Pearson の相関係数	-.068	-.107	-.102
	N	1157	592	565

\*p<.05

表 9 相関係数（男女別）

		自尊感情得点 合計（男子）	自尊感情得点 合計（女子）
ADHD合計	Pearson の相関係数	-.187	-.053
	N	598	559
不注意合計	Pearson の相関係数	-.226 *	-.083
	N	598	559
衝動性合計	Pearson の相関係数	-.115	.014
	N	598	559

\*p<.05

表10 ADHD傾向と自尊感情の相関（学年・性別）

		自尊感情得点 合計（3年男子）	自尊感情得点 合計（3年女子）	自尊感情得点 合計（5年男子）	自尊感情得点 合計（5年女子）
ADHD合計	Pearson の相関係数	-.234 *	-.115	-.222 *	-.135
	N	303	289	295	270
不注意合計	Pearson の相関係数	-.284 *	-.164	-.236 *	-.169
	N	303	289	295	270
多動性-衝動性合計	Pearson の相関係数	-.149	.002	-.154	-.066
	N	303	289	295	270

\*p<.05

表11 相関係数（ADHD傾向と自尊感情下位尺度）

		自尊感情 下位尺度 （家族）	自尊感情 下位尺度 （学業）	自尊感情 下位尺度 （友だち）	自尊感情 下位尺度 （願望）	自尊感情 下位尺度 （身体イメージ）	自尊感情 全般項目
ADHD合計	Pearson の 相関係数	-.146	-.129	-.090	-.015	.002	-.090
	N	1157	1159	1159	1159	1159	1159
不注意合計	Pearson の 相関係数	-.162	-.168	-.117	-.022	-.016	-.113
	N	1157	1159	1159	1159	1159	1159
多動性-衝動性 合計	Pearson の 相関係数	-.104	-.059	-.041	-.004	.028	-.046
	N	1157	1159	1159	1159	1159	1159

## ② ADHD傾向のサスペクト群と非サスペクト群における自尊感情下位尺度（自己認知の側面および全般的な自尊心）得点の違い

ADHD RS-IV-J (学校版) の得点をもとに、文部科学省が実施した「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」のカウント方法を参考にして、奇数番号の項目（不注意）で6ポイント以上かつ偶数番号の項目（多動性－衝動性）で6ポイント未満のものを「不注意のサスペクト」、偶数番号の項目（多動性－衝動性）で6ポイント以上かつ奇数番号の項目（不注意）で6ポイント未満のものを「多動性－衝動性のサスペクト」とし、奇数番号の項目（不注意）で6ポイント以上かつ偶数番号の項目（多動性－衝動性）で6ポイント以上の両方を満たすものを「混合型のサスペクト」とした。ただし、回答の、0, 1点を0点に、2, 3点を1点にして計算した。これは、1)のADHD傾向で述べたサスペクト群と一致している。なお、ここでは、自尊感情のデータのないものを除いて、ADHDの「不注意型のサスペクト」23名、「多動性－衝動性型のサスペクト」2名、「混合型のサスペクト」16名のデータが得られた。つまり、学級担任が行動面でなんらかの理由で気になる子どもは合計41名（3.54%）であった。

ADHDの「不注意」の項目で6ポイント以上の群においては、表12のように、「家族」( $t=3.087$  (1155),  $p<.01$ )、「学業」( $t=3.101$  (1157),  $p<.01$ )、「友だち」( $t=2.720$  (1157),  $p<.01$ )の下位尺度で6ポイント未満の群と有意な差がみられた。また、「全般的な自

尊心」でも、有意な差がみられた ( $t=2.518$  (1157),  $p<.01$ )。しかし、「身体イメージ」、「願望」の下位尺度では、有意な差はみられなかった。つまり、「不注意」の項目で6ポイント以上の群では、6ポイント以下の群に比べて、「家族」「学業」「友だち」「全般的な自尊心」の尺度において、自己評価が低いといえる。また、「身体イメージ」と「願望」においては自己評価に差がないといえる。

ADHDの「多動性－衝動性」の項目で6ポイント以上の群においては、表13のように、6ポイント未満の群との有意な差は、どの下位尺度でもみられなかった。しかし、「家族」でのみ有意傾向がみられた。また「全般的な自尊心」でも有意な差はみられなかった。

ADHDの「混合型サスペクト」群においては、表14のように、「家族」においてのみ非サスペクト群と有意な差がみられた ( $t=2.978$  (1155),  $p<.01$ )。つまり、「混合型サスペクト」群においては、「家族」の尺度で自己評価が低い。

「不注意型のサスペクト」群23名、「多動性－衝動性型のサスペクト」群2名、「混合型のサスペクト」群16名の合計41名を「ADHDサスペクト」群として、非サスペクト群との自尊感情合計得点および自尊感情下位尺度得点の違いを示したのが表15である。

まず、自尊感情の合計得点において有意な差がみられた。すなわち、「ADHDサスペクト」群の平均が61.8点、非サスペクト群の平均が69.1点で有意に低いことがわかった ( $t=2.803$  (1155),  $p<.01$ )。

さらに、下位尺度ごとにみると、「ADHDサスペ

表12 「不注意」6ポイント以上の群と6ポイント未満の群における自尊感情下位尺度（自己認知の側面および全般的な自尊心）得点の違い

	6ポイント以上 N=39	6ポイント未満 N=1120	t 値	有意水準
「身体イメージ」	1.609 (1.060)	1.671 (0.957)	0.394 (df=1157)	n.s.
「家族」	2.026 (1.197)	2.541 (1.019)	3.087 (df=1155)	$p<.01$
「学業」	1.801 (0.900)	2.283 (0.955)	3.101 (df=1157)	$p<.01$
「友だち」	2.494 (1.047)	2.872 (0.846)	2.720 (df=1157)	$p<.01$
「願望」	1.615 (1.097)	1.576 (0.955)	0.250 (df=1157)	n.s.
「全般的自尊心」	2.189 (0.778)	2.485 (0.719)	2.518 (df=1157)	$p<.01$

表13 「多動性－衝動性」6ポイント以上の群と6ポイント未満の群における自尊感情下位尺度（自己認知の側面および全般的な自尊心）得点の違い

	6ポイント以上 N=18	6ポイント未満 N=1141	t 値	有意水準
「身体イメージ」	1.931 (1.143)	1.664 (0.957)	1.168 (df=1157)	n.s.
「家族」	1.931 (1.197)	2.533 (1.024)	2.471 (df=1155)	+
「学業」	1.917 (0.813)	2.272 (0.959)	1.565 (df=1157)	n.s.
「友だち」	2.833 (0.924)	2.859 (0.855)	0.128 (df=1157)	n.s.
「願望」	1.806 (1.123)	1.574 (0.957)	1.016 (df=1157)	n.s.
「全般的自尊心」	2.389 (0.715)	2.476 (0.723)	0.508 (df=1157)	n.s.



表14 ADHD「混合型サスペクト」群と非サスペクト群における自尊感情下位尺度（自己認知の側面および全般的な自尊心）得点の違い

	「混合型サスペクト」N=16	非サスペクトN=1120	t 値	有意水準
「身体イメージ」	1.922 (1.161)	1.665 (0.957)	1.063 (df=1157)	n.s.
「家族」	1.766 (1.164)	2.534 (1.024)	2.978 (df=1155)	p<.01
「学業」	1.891 (0.861)	2.272 (0.958)	1.584 (df=1157)	n.s.
「友だち」	2.734 (0.933)	2.861 (0.855)	0.586 (df=1157)	n.s.
「願望」	1.688 (1.124)	1.576 (0.957)	0.461 (df=1157)	n.s.
「全般的自尊心」	2.320 (0.713)	2.477 (0.722)	0.861 (df=1157)	n.s.

表15 「ADHDサスペクト」群と非サスペクト群における自尊感情下位尺度（自己認知の側面および全般的な自尊心）得点の違い

	サスペクト N=41 (標準偏差)	非サスペクト N=1118 (標準偏差)	t 値	有意水準
「身体イメージ」	1.628 (1.061)	1.670 (0.957)	0.274 (1157)	n.s.
「家族」	2.085 (1.198)	2.540 (1.019)	2.786 (1155)	p<.01
「学業」	1.817 (0.880)	2.283 (0.956)	3.075 (1157)	p<.01
「友だち」	2.549 (1.051)	2.870 (0.846)	2.368 (1157)	p<.05
「願望」	1.671 (1.103)	1.574 (0.954)	0.632 (1157)	n.s.
「全般的自尊心」	2.226 (0.782)	2.484 (0.719)	2.253 (1157)	p<.05
自尊感情合計	61.805 (16.900)	69.108 (16.365)	2.803 (1155)	P<.01

クト」群と非サスペクト群において、「家族」( $t=2.786$  (1155),  $p<.01$ )、「学業」( $t=3.075$  (1157),  $p<.01$ )、「友だち」( $t=2.368$  (1157),  $p<.05$ )において有意な差がみられた。つまり、「ADHDサスペクト」群においては、非サスペクト群に比べて、「家族」や「学業」、「友だち」において自己評価が低いといえる。しかし、「身体イメージ」や「願望」においては有意な差はなかった。また、全般的な自尊心を示す8項目の得点においても有意な差がみられた。これは、自尊感情の合計得点と同様に考えられる。つまり、本調査においては「ADHDサスペクト」群では、非サスペクト群に比して、自尊心が低いことが明らかになった。

### 考察

本研究を通してADHD傾向の高い児童（ADHDサスペクト群）の自尊感情とそれぞれの下位尺度において、ADHD傾向の高い児童は自尊感情が低く、それは、「学業」「家族」「友だち」のそれぞれの領域においての自己評価の低さによるものであることが明らかになった。サスペクト群と非サスペクト群で最も有意な差がみられたのは、「学業」である。これは、ADHDの主な障害である不注意と特に関係が深いと考えられる。つまり、注意散漫になりやすく授業に集中できないことで、知的な遅れがなくても学年が上がるにつれて課題についていけなくなり、学習の遅れが目立ってくるためと考えられる。さらに忘れ物をしたり、授業中に私

語をしたり、学習の構えができにくく、学習に対する意欲を失っていくのではないかとと思われる。また、文科省の調査でも明らかになったように、行動面で問題を抱える場合をADHD傾向があると考え、学習面で問題を抱える場合をLD傾向があると考えるとその合併率は高く、約半数の子どもがADHD傾向と同時にLD傾向も持っていることになる。これらのことから、サスペクト群の子どもたちは、学業における支援を早急に必要としているといえよう。

次に差が大きかったのは、「家族」であった。「家族」の項目は、「自分のせいで親は不幸だと思う」「家族はわたしにがっかりしている」「今の自分とちょっとちがっていたら、親も幸せだと思う」「家を出て行きたいと思うことがある」という4項目である。サスペクト群が、非サスペクト群に比べて、家族の中における自分の存在価値を見つけられずに自己評価を低下させている様子が伺える。岩坂ら（2002）は、ADHD児の親訓練プログラムを実施し、親の自信度の回復に有効であり、ADHDの症状に関して年少ほど有効である傾向があることを述べている。このことは家族の支援の必要性を示しているといえる。

次に、差が認められたのは、「友だち」である。「友だち」の項目は「たくさん友だちがいる」「友だちになりたい人とうまく友だちになれる」「自分はひとりぼっちである」「自分は友だちにとっていい友だちだと思う」の4項目である。非サスペクト群と比較して、サ

スペクト群の子どもは、友だちの数が少なくひとりぼっちであると感じ、友だちを作るのが上手でなく、自分が友だちにとっていい友だちと思えないなどの様子が伺える。このように、サスペクト群の子どもは友だち関係において自己評価が低い。友だち関係をみていくうえで欠かせないのがソーシャルスキルの発達である。しかし、ADHD児は、社会性においてつまづきがみられ、友人を求める気持ちはあっても適切に接する方法が分からないことから結果的に相手にされなくなってしまうようなことも多い。また、相手の身になって考えられないことで、反感を買ったり、トラブルを生じさせたりすることもある。これらの集団場面での不適応や友人関係の不成立は、孤独感、自信喪失、意欲喪失など心理面へのダメージともなる。このような二次的な状態が、さらなる社会的不適応となり悪循環を生むことになる。このためソーシャルスキルトレーニングをADHD児に対する支援として早急に取り入れていく必要がある。しかし、教師や管理職のソーシャルスキルに関する知識や意識は必ずしも高いとはいえない。教育現場においてどのように取り入れていくか今後の大きな課題である。

本研究はマクロ的な調査でADHD傾向と自尊感情の関係を明らかにしたものである。これらの結果をふまえ、今後の研究課題として、まず、自尊感情の測定尺度に関して長期的な見通しをもった検討が必要であり、継続的な取り組みの中で小学生の発達段階をふまえた、自尊感情を測定する尺度の一般化が必要とされる。さらに、幅広い学年を対象とした調査の実施と分析(就学前から小、中学生まで発達のにとらえること)、および今回の研究とは対照的に学校、学級、個々の児童生徒などをミクロ的にとらえた個別的な検討も必要である。そのためには簡単に実施できるアセスメントツールの開発なども研究課題となろう。

#### 引用参考文献

- 1) 岩坂英巳・清水千弘・飯田順三・川端洋子 (2002) 注意欠陥/多動性障害 (AD/HD) 児の親訓練プログラムとその効果について、児童青年精神医学とその近接領域、43 (5)、483-497
- 2) 井上とも子 (2004) 学校教育ができること、上林靖子・齋藤万比古・小枝達也・長尾圭造・山田佐登留・大隈紘子 (編)、ADHD (注意欠陥/多動性障害) - 治療・援助法の確立を目指して、星和書店、85-96
- 3) 遠藤辰雄 (1992) セルフ・エスティーム研究の視座、遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽 (編)、セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求、ナカニシヤ書店、8-19、
- 4) 榎戸英佐子 (1999) 注意欠陥多動性障害 (ADHD) の臨床的研究、I - 臨床症状と長期経過における適応性、児童青年精神医学とその近接領域、40 (4)、369-385
- 5) 齋藤万比古 (2000) 注意欠陥/多動性障害 (AD/HD) とその並存障害 - 人格発達上のリスク・ファクターとしてのADHD -、小児の精神と神経、40 (4)、243-254
- 6) 杉山登志郎 (2000) 注意欠陥多動性障害と非行、小児の精神と神経、40 (4)、265-277
- 7) 鈴木智子・中野明徳 (2002) 学習障害、注意欠陥/多動性障害の子どもたちの自尊心 - 「ほめる」ことに焦点を当てた関わり、福島大学教育実践研究紀要、42、71-77
- 8) 田中康雄 (2001) 注意欠陥/多動性障害における対応 - 他の専門職との協力・連携体制について、小児の精神と神経、41 (2、3) 107-117
- 9) 高山恵子 (2003) AD/HDをもつ子にかかわる方へ、田中康雄 (編) ボクたちのサポーターになって!! 1、えじそんブックレット、6-16
- 10) 田中康雄・毛利義臣 (1995) 注意欠陥 (多動) 障害児にみられる情緒的問題 - 情緒障害の特徴と親の養育態度、小児の精神と神経、35 (4)、301-311
- 11) 中田洋二郎 (2003) 標準化された評価尺度の利用、注意欠陥/多動性障害 - AD/HD - の診断・治療ガイドライン、AD/HDの診断・治療研究会、上林靖子、他、じほう、46-60
- 12) 中田洋二郎 (2003) AD/HDをもつ子どものための教育、上林靖子・北道子・藤井和子・井潤知美 (編)、ADHDとはどんな障害か - 正しい理解から始まる支援 -、少年写真新聞社、81-88
- 13) 藤井和子 (2003) ペアレントトレーニング・プログラム - AD/HDを持つ子どもと親への理解と援助のために -、小児の精神と神経、43 (1)、18-22
- 14) 福島章 (2000) ライフサイクルにおけるADHD、精神療法、26 (3) 238-245
- 15) ヘンリック、ホロエンコ・宮田敬一監訳 片野道子訳 (2002) 親と教師のためのAD/HDの手引き、二瓶社、7-12
- 16) ポープ、A. W.・ミッキヘイル、S. M.・クレイグヘッド、W. .E.・高山巖監訳 佐藤正二・佐藤容子・前田健一共訳 (1992) 自尊心の発達と認知行動療法、岩崎学術出版社、1-8
- 17) マーク、セリコウィッツ・中根晃・山田佐登留訳 (2000) 注意欠陥多動性障害ADHDの子どもたち、金剛出版、58-84
- 18) Mari TANAKA (2003) "The Self-Esteem of People with Attention Deficit Hyperactivity Disorder"、東北大学大学院教育学研究科研究年報51、197-210
- 19) 文部科学省 (2004) 小・中学校におけるLD (学習障害) ADHD (注意欠陥/多動性障害) 高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン (試案)、東洋館出版社